

びわこ文化公園植物だより〔β版〕

ヒヨドリバナ

キク科、学名 *Eupatorium makinoi*

ヨメナ

キク科、学名 *Aster yomena*

アケボノソウ

リンドウ科、学名 *Swertia bimaculata*

アキノウナギツカミ

タデ科、学名 *Persicaria sagittata*



ヒヨドリバナ

残暑も勢いをひそめ、「夕照の庭」の奥にある湿地では秋の草花が盛りを迎えています。背が高く、白い花が遠くからでも目立つのはキク科のヒヨドリバナ。小さな筒状の花が集まって、傘のように平らな大きな花序(花の集まり)をつくっています。

ヒヨドリバナの花は蜜をたくさん出すらしく、たくさんの昆虫が訪れます。橙色に黒い斑点のツマグロヒョウモンが多いのは、幼虫の餌になる野生のスミレ類が園内に多いからでしょうか。ミツバチとアシナガバチの中間のような姿をしたハラナガツチバチの仲間は、植物の根を食い荒らすコガネムシの幼虫に産卵・寄生するので、植物を育てる立場からすると益虫ということになります。



ツマグロヒョウモンの雄 ハラナガツチバチの一種

ヒヨドリバナは山の上から水辺までどこでも見られる普通種ですが、じつは謎の多い植物です。このへんにあるヒヨドリバナは単為生殖といって、花は咲くのに、花粉がつかなくても勝手に種子ができてしまうのです。花粉を虫に運んでもらう必要がないなら、なぜ訪れる虫たちに蜜をふるまうのでしょうか？ 花が蜜をつくるのだからタダではないのです。

さらに奇妙なことに、その蜜にはピロリジンアルカロイドという毒成分が含まれているといえます。昆虫たちは甘さの誘惑に逆らえず、毒のある蜜を吸っているのでしょうか？ アサギマダラという大きくて美しいチョウは、ヒヨドリバナの蜜に含まれるこの毒成分を吸収して体の中で性フェロモンに作り変えていることが、広島大学などの研究チームによって明らかにされています。

木道の上に低く枝を伸ばして薄紫の花を咲かせているのは、野菊の一種のヨメナです。ヨメナの若芽は若菜摘みの対象として有名で、ヨメナご

飯や、てんぷら、お浸しなどにして食べられます（園内では摘まないでくださいね）。ヨメナは『万葉集』には「うはぎ」の名で載っていますが、やはり花を愛でた歌ではなく、若菜を摘む歌です。



ヨメナ

背の高いヒヨドリバナと背の低いヨメナに気をとられてつい見落としてしまいそうになりますが、その中間の高さに咲いているアケボノソウの花もぜひさがしてみてください。白い花びらの上の黒と黄色の斑点模様を明け方の空に見立てて“曙草

(アケボノソウ)”。先人のネーミングセンスは粋ですね。黄色の斑点は蜜腺です。花に虫がきていたら、注意してみてください。花の中心ではなく、黄色い斑点を一所懸命になめていませんか？



アケボノソウ

さらに見落としそうなのは、これらの花の足もとに白い小さな粒のような花を咲かせているウナギツカミです。針金のように細く長い茎を触ってみるとチクチクと手に引っかかるトゲがあることが分かります。ぬるぬるしたウナギもこのトゲを使えばつかめることから名前がついたと言われます

が、ほんとうに実用的だったのでしょうか、単なるもののたとえでしょうか？



アキノウナギツカミ

夕照が翳るまで花と虫たちを眺めていたい、秋の午後です。

(龍谷大学農学部・小栗栖潤／川北暁仁／岸涼子／日下隼／吉野茜／三浦励一)

- ❁ ここで紹介した植物たちは [ここ](#) で見ることができます
(クリックで Google マップにリンク。10m 程度の誤差が出ることがあります。)